単純未来形と迂言的未来形について

渡　邊　淳　也

1．はじめに[1]

本稿の目的は，フランス語におけるふたつの未来形の機能について考察することである。ひとつは，j'aimerai, tu aimeras, il aimera... のように語尾屈折によって示される単純未来形（futur simple），もうひとつは je vais aimer, tu vas aimer, il va aimer... のように，動詞（または準助動詞 semi-auxiliaire とみなされることもある）aller が不定法をしたがえる迂言的未来形（futur périphrastique）である 。

渡邊（2009 b）では，単純未来形が，助動詞 avoir を不定法に接尾することにより成立したという経緯に注目し，他のロマンス諸語とも比較しながら論ずることにより，その綜合的（synthétique）なステイタスはあくまでも相対的なものであることを示した。しかし，その相対性のなかでいうなら，フランス語では形態論的にも意味論的にも，単純未来形の綜合化・文法化が比較的高度に進展しているということも主張した。また，単純未来形の綜合化は，意味の側面からいうと時制化の方向性にあることを述べ，事例研究として，単純未来形のモダールな用法について，未来性という時間的性格をふまえた説明が可能であることを示した。

一方，渡邊（2008）では，単純未来形を主たる議論の対象とはしなかったものの，未来の時間表象のひとつの典型的なありかたとして，分岐的時間（temps ramifié）について検討した。この概念は，単純未来形の機能を，迂言的未来形との対比において考察するためにも，たいへん有効であると考えられる。

さらに, 渡邊（2012）では, 叙想的時制（temps *de dicto*）という概念によって時制のモダールな用法の説明が可能であることを示した。そこでは，叙想的アスペクト（aspect *de dicto*）にもふれたこともあって，その際の適用事例は半過去や現在分詞といった，未完了相をあらわす形式に終始したが，叙想的時制による説明は，単純未来のモダールな用法にも適用可能であるという見とお

しをもっている。

本稿では，以上の 3 つの論文で展開してきた議論をふまえながら，時制的用法，ならびにモダールな用法の両面にわたって，単純未来形と迂言的未来形の機能の差異を確認し，それらの機能を説明しうる仮説を提出し，検証することをめざしたい。

以降の論述は，つぎに示すような手順からなっている。まず 2 節で，単純未来形と迂言的未来形の用法の差異を確認する。それにもとづいて，3 節では，単純未来形の本質的機能を説明する仮説を提出するとともに，さらに他の事例へとそれを適用することをこころみる。つづいて 4 節では，迂言的未来形の本質的機能を説明する仮説を提起し，その検証として，いくつかの他の事例に仮説を適用してみる。5 節では，単純未来形と迂言的未来形の本質的機能の差異がよくあらわれている事例として，否定とのかかわりについて論ずるとともに，「異常なふるまい」をあらわす用法として迂言的未来形とは別扱いされることがある「aller ＋不定法」についても論ずる。

2．単純未来形と迂言的未来形の用法の比較

この節では，単純未来形と迂言的未来形の用法を文例にもとづいて比較し，とくにどちらかの使用にかかる制約を見さだめることにより，それぞれの時制形式についての仮説を立てるための予備的考察をする。

2.1. 伝統的な文法書や語学教科書などでは，迂言的未来形は「近接未来形」(futur proche) ともよばれ，「近い」未来をあらわすのに対して，単純未来形は「遠い」未来をあらわすとされることが多い。

しかし実際には，「近い」事態でも迂言的未来形が排除される場合があり，「遠い」事態でも迂言的未来形が使える場合がある。

(1) Inutile de pousser, je ne { **descendrai** / ***vais descendre** } que quand le train sera complètement arrêté. (Franckel 1984, p.65)
押してもむだですよ。わたしは電車が完全に止まってからしか降りませんから。[2]

(2) Je **vais déménager** l'année prochaine. (idem) 来年引っ越します。

(3) Je ne **vais** pas le **revoir** avant longtemps. (idem)

彼とは長いこと会わないことになるだろう。

(4) Ça **va durer** dix-sept ans comme ça.（Touratier 1996, p.182）
この調子で 17 年は続くよ。

2.2. 単純未来形に対する制約をまとめるとすると，つぎの(5)のようになると思われる。

(5) 発話時点に位置づけられる事態，あるいは発話時点から連続的にとらえられる事態には，単純未来形は使えない。

たとえばつぎのような例文に，この制約があらわれている。

(6) [帰りじたくをしながら] Bon, ben je { **vais** te **dire** / *te **dirai** } au revoir.（Leeman-Bouix 2002[2], p.162）
さてと，さようならを言おうか。

(7) Attention, tu { **vas tomber** / ***tomberas** }.（ibidem, p.163）
気をつけて，転ぶよ。

(8) Maintenant qu'il a fini ses études, il { **va retourner** / ***retournera** } au Japon.（Franckel 1984, p.67）
いまや学業を終えたので，かれは日本に帰ることになる。

順に見ておくと，(6)では，話者は帰りじたくをしているのであるから，「さようならを言う」ことは，明確に発話時点（からの連続性）に位置づけられる。(7)では，対話者がいま現にとっている姿勢や歩調が，転倒に直結するものであると言いたいのであるから，対話者が転ぶことは，やはり発話時点（からの連続性）に位置づけられる。(8)では，文頭の時間副詞 maintenant によって発話時点が主題化されているので，発話時点について語るわく組みができている。以上のような理由から，(6)-(8)ではいずれも，単純未来形は排除される。

(8)にあらわれていた maintenant のほかにも，à présent, d'un instant à l'autre, tout de suite, immédiatement など，発話時点指向の時間副詞と共起するのは，迂言的未来形が圧倒的である（cf. Novakova, pp.130 sq）。

(9) Je { **vais partir** / ***partirai** } tout de suite.

(Leeman-Bouix 2002[2], p.163)

すぐに出発します。

(10) Tu { **vas** l'**appeler** / ***l'appelleras** } immédiatement. (idem)
ただちに彼に電話してください。

また，すでにみた(4)や下記の(11)のように durer, se poursuivre, continuer（いずれも「つづく」）, vieillir（「古びる，老ける」）などの動詞は，その語彙的意味が事態の連続性をふくんでいるために，迂言的未来形と親和性が高く，逆に，単純未来形とはあいいれない。(Jeanjean 1988, p.239；Novakova 2001, pp.129-130)

(11) Si ça continue, je { **vais** me **fâcher** / *me **fâcherai** }. (idem)
もしこれが続くなら，わたしは怒るぞ。

(11)は，通常の文脈では単純未来形と親和性が高いはずの si... 節が共起しているにもかかわらず，単純未来形が排除されることが注目される。ことほどさように，発話時点との連続性は，単純未来形とはあいいれないのである。

2.3. こんどは，迂言的未来形にかかる制約を確認しよう。それはちょうど，上記でみた単純未来形に対する制約と裏返しのような関係にあり，つぎのようにまとめられると思われる。

(12) 発話時点から断絶した事態には，迂言的未来形は使えない。

この制約をよく示している例として，以下のような文がある。

(13) Je te prie de me prévenir quand tu { **verras** / ***vas voir** } l'eau bouillir. (Franckel 1984, p.67)
お湯がわいたのを見たら知らせてください。

(14) Au moment où tu { **liras** / ***vas lire** } ces lignes, je serai très loin. (idem)
きみがこのくだりを読むときには，わたしはもう遠くに行っているでしょう。

(15) Je { ? **vais** lui **écrire** / lui **écrirai** } demain.
(Leeman-Bouix 2002[2], p.162)
明日かれに手紙を書きます。

(16) Je { ? **vais partir** / **partirai** } dans un moment. (ibidem, p.163)
すぐに出発します。

(17) Un jour, je { ?? **vais t'expliquer** / **t'expliquerai** }. (idem)
いつかはきみに説明するよ。

(18) Un de ces jours, tu { ?? **vas venir** / **viendras** } me voir. (idem)
近日中に，会いに来てください。

まず(13)では，湯がわくのは，たとえわずか数十秒後といえども，湯がわいていない現状とは質的にことなる，発話時点から断絶した未来のことである。(14)は，紙媒体の手紙に書かれた文であるので，話者が手紙を書くときと，それが相手に届いて，読まれるときとのあいだには，明確な断絶がある。

(15)～(18)では，不自然さの差（? / ??）の判断は Leeman-Bouix によるものである。時間副詞が示す発話時点からのへだたりの相違（時間の長短だけでなく，どの程度異質の時間ととらえられているか，という相違）によって，若干ちがいはあるものの，いずれも未来指向の副詞であるため，それらと近接未来形を共起させようとすると不自然になるのである[3]。

つぎの(19)は，迂言的未来形と un jour の不調和を，いわば，逆手にとって利用することによって，笑劇のせりふになっている。

(19) Je **vais** vous **rembourser** [pause] un jour.
(G. Bedos, cité Barceló et Bres 2006, p.167)
払いもどしますよ [間をおいて] いつかはね。

Je vais vous rembourser だけだと，あたかも，いまからすぐにでも払いもどしそうないきおいであるが，間をおいて un jour ということにより，それはにわかに，まったく不定の未来へと先のばしされることになるのである。ここで笑いが起きる。

(19)における un jour のように，発話時点から断絶した未来時を指示する時間副詞をともなうときは，明確に単純未来形が好まれる。迂言的未来形が時間副詞をともなうのは稀である（Sundell 1991, pp.117-123 の調査によると，未

来指向の時間副詞をともなう発話文での単純未来形と迂言的未来形の生起の百分比は 91 対 9 である)。

2.4. 以上をふまえて(1)～(4)(以下に(20)～(23)として再掲)にもどると,これらの差異を説明しうるのも「連続性 / 断絶」という性質のちがいであると思われる。

(20) [=(1)] Inutile de pousser, je ne { **descendrai** / ***vais descendre** } que quand le train sera complètement arrêté.
押してもむだですよ。わたしは電車が完全に止まってからしか降りませんから。
(21) [=(2)] Je **vais déménager** l'année prochaine. 来年引っ越します。
(22) [=(3)] Je ne **vais** pas le **revoir** avant longtemps.
彼とは長いこと会わないことになるだろう。
(23) [=(4)] Ça **va durer** dix-sept ans comme ça.
この調子で 17 年は続くよ。

それぞれの例に即していうと,(20)では,動詞によってあらわされる事行(procès)が,わずか数秒後といえども,quand le train sera... によって示される,発話時点とは質的にことなる時点に位置づけられることから,単純未来形が用いられるのである。それに対して,(21)では,引っ越しという大きな作業の準備段階にすでに入っているという認識(たとえば,少しづつ荷物をまとめているとか,大きな買い物はしないなどの心づもりがその認識の一環をなす)があるため,迂言的未来形が用いられている。(22)は彼と再会できない今からの長い期間を均質にとらえるために迂言的未来形が用いられる。(23)については,2.2 節での議論を参照されたい。

2.5. しかしながら,話しことばでは,2.3 の最後で述べたことに反して,「迂言的未来形＋未来時指示の時間副詞」の実例がけっして少なくない。そのため,話しことばでは単純未来形から迂言的未来形への交代が起きてきているといわれることがある。

また,それと平行的に,非規範的変種のフランス語では,規範的変種にくらべて迂言的未来形の比率が高いということが確認されている(Naffati et

Queffélec 2004, p.75)。

つぎの例は，Novakova（2001）が引用している例であるが，いずれも政治家が口頭でおこなった発言である。

(24) Dimanche prochain, vous **allez désigner** l'Assemblée Nationale pour cinq ans.　(J. Chirac, le 27 mai 1997 sur France 2, cité dans Novakova 2001, p.127)
つぎの日曜日，みなさんは向こう 5 年の任期の国民議会の投票をすることになります。

(25) La décision **va aboutir** le 3 juin prochain à la fermeture de l'usine Renault.　(*Le Journal de 20h* sur France 2, le 3 mars 1997, cité dans Novakova, ad loc.)
この決定は，こんどの 6 月 3 日，ルノーの工場を閉鎖することにつながるでしょう。

(26) Il **va** y **avoir** en novembre 1995, à la fin de l'année, une conférence euro-méditerranéenne.
(L. Jospin, dans *Le Débat*, cité dans Novakova, ad loc.)
1995 年 11 月，つまり年末ちかくに，ヨーロッパ・環地中海圏の会議があります。

こうした例については，多くの研究が，単純未来形の「代用」として迂言的未来形をもちいることが話しことばの文体的特徴であるとしている。たとえば，南舘（1998）は，つぎのようにのべている。

(27)「Va [＝迂言的未来形] がもつもう一つの働きは，状況補語 [＝時間副詞] を伴って，ra [＝単純未来形] の代用として使われる場合であるが，その際には，va のこれらの特異性は無効化されており，二義的になっている」
(ibidem, p.31, 下線，ならびに [...] 内は本稿筆者による)

しかし，(24)～(26) の例をみると，未来時指示の時間副詞はともなっているものの，発話時点との連続性が色濃く感じられる。いずれも，今後のなりゆきを説明する際，「さあ，これから，事態はこのように展開してゆきますよ」

というように，話している今との関与性が強いものとして提示することにより，視聴者の関心をひこうとしているように思われる。とくに(25)は，aboutir（「ゆき着く」）という移動動詞が隠喩的に用いられており，迂言的未来形をみちびく動詞 aller が果たす働きとも協調しあっているといえる。そのように考えると，こうした例は，迂言的未来形の本来の機能をけっして曲げるものではなく，むしろ，おなじ図式を維持することによってこそ，うまく説明ができるように思われる。つぎの Franckel（1984）の指摘は傾聴にあたいする。

(28) « Dans le premier énoncé [=*Je vais partir demain*] qui [...] correspond à un état localisé à t_0, *demain* opère une **localisation secondaire du dernier point de cet état**. Dans le second énoncé [=*Je partirai demain*] qui met en jeu le futur [...], le localisateur est non plus t_0, mais bien *demain*. »（ibidem, p.67, 強調渡邊）
「第 1 の発話文［=*Je vais partir demain* 明日出発します，迂言的未来形］は，t_0［発話時点］に位置づけられた状態に対応している。「demain 明日」は，その状態の終点を二次的に位置づけているだけである。第 2 の発話文［=*Je partirai demain* 明日出発します，単純未来形］は，未来を機能させているのであり，位置づけ先は t_0 ではなく，まさに「demain 明日」である。」

このように，迂言的未来形は，あくまでも発話時点への位置づけを本義としているのであり，その機能は話しことばに特有とされる例においても保たれていると考えたい。それでは，現象として「迂言的未来形＋未来時指示の時間副詞」が話しことばに多いのはなぜであろうか。それは単に，書きことばよりも話しことばのほうが，「われ・ここ・いま」の中心性が強く，発話時点への位置づけや，発話時点との連続性に言及しやすいということ[4]からくる，結果的現象であると思われる。

また，(28)で Franckel が主張している，たとえ未来時指示の時間副詞が共起していても迂言的未来形の主たる定位は発話時点にあるという考えかたを支持する現象として，(29)のように，迂言的未来形が，同一文中で，maintenant と共起すると同時に，未来時指示の時間副詞とも共起することができるという事例をあげることができる。

(29) Maintenant, on **va manquer** d'argent à la fin du mois. [5]
いま（や），われわれは月末にはお金が足りなくなるだろう。

この例でも，maintenant（que...）が共起している(8)の例と同様，視点が発話時点におかれていることはいうまでもない。たとえば，大きな買い物をしたときに（29）の文を発するひとは，散財した現在に主たる視点をおいたうえで，その延長で窮乏してゆく月末にいたるまでを展望しているのである。

2.6. 以上で見てきたような，「単純未来形は発話時点から断絶したものとしてとらえられる未来の事態をあらわし，迂言的未来形は発話時点から連続的にとらえられる事態をあらわす」という対比をさらに裏づけるほかの現象を 3 つほど見ておこう。

第 1 に，もし単純未来形と迂言的未来形とであらわされる事態を，時間的前後関係におくなら，「迂言的未来形のあと単純未来形」の順が自然である。

(30) Reste assise, tu **vas te détendre** et ensuite tu **partiras**.
(Leeman-Bouix 2002[2], p.162)
座っていなさい。まずはリラックスして，それから出発しなさい。
(31) *Reste assise, tu **te détendras** et ensuite tu **vas partir**. (idem)

これは当然，発話時点との連続性におかれる事態から出発して，そこから断絶した事態に至る順序のほうが自然である，ということからくる現象である。

第2に,「愛の告白の逆説」(Barceló et Bres 2006)。愛を語るには，(32)～(33)にみるように，単純未来形のほうが適しており，発話時点への定位であるはずの，迂言的未来形のほうが不自然になる。

(32) Je t'**aimerai** toujours. (Barceló et Bres 2006, p.170)
きみをずっと愛するよ。
(33) ? Je **vais t'aimer** toujours. (idem)
(34) ? Je suis sur le point de t'aimer. (idem)

これは一見逆説的であるが，(32)は現在についてはなにも言わず，永遠の愛を未来に定位している（「いついつまでも」）。現在愛していることは，ひとえ

に推論によって理解される。それに対して，(33)は現状を愛する「寸前」と言ってしまっている（＝(34)）という点で不自然なのである。

第 3 に，toujours の場合と対照的に，jamais は迂言的未来形との親和性が高い（cf. Wilmet 1997, p.378）。

(35) [Le locuteur ne sait pas où placer une étagère]
Je **vais** jamais y **arriver.** (Wilmet, ad loc.)
[話者は棚をどこに置いてよいかわからない]
決してうまくいくことはないだろう。

なぜ jamais が迂言的未来形と適合するかというと，出口のない状況を発話時点との連続性に位置づけており，その状況が完全に均質であるからである。

3．単純未来形の基本図式とその適用

3.1. 以下では，本稿で単純未来形に関する仮説として保持する基本図式を提示しよう。

単純未来形におかれた動詞事行を P とすると，P は未来時 t_{+1} に位置づけられる。その際，発話者の視点 (point de vue, PDV)[6] も t_{+1} におかれる。

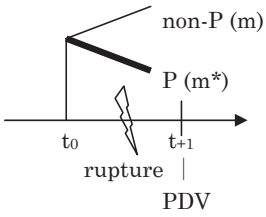
渡邊 (2008) で示した分岐的時間 (temps ramifié) による可能世界意味論のモデルにもとづき，単純未来形によって t_{+1} に位置づけられる P は，他の可能世界 (monde(s) possible(s), m) にくらべて相対的に蓋然性が高いとみなされる期待世界 (monde des attentes, m*) を構成していると考える[7]。

P が分岐的時間のなかでの期待世界を構成するということは，P / non-P の分岐・対立を前提としたうえで，P が選択されるということである。

その判断は発話者のいる発話時点 t_0 においてなされるが，t_0 と t_{+1} の間には断絶がある。

以上のことを図示すると，つぎの(36)のようになる。

(36)



3.2. 渡邊（2004, pp.210-212 および 2009 b, p.134）で示した，単純未来形は不定法由来部分による「表象の標示」と，助動詞由来部分による「その表象の成立（現働化）の標示」をあわせもつという仮説は維持する。不定法由来部分があらわす「表象」は t_{+1} に位置づけられ，助動詞由来部分によってあらわされる「現働化」は t_0 に位置づけられる。単純未来形の「表象」性は，不定法由来部分で示される事行をことなる次元に位置づける「断絶」によって保証される。

単純未来形にふくまれる不定法形態素 -r の機能は，つぎの(37)のようなものであると考えられる。

(37) 不定法形態素 -r は，その動詞の語彙的表象を指示する。

不定法は，辞書などで動詞の語彙を代表する法である。そのことは，不定法が表象を示すことから，言語記号として言及する場合に適しているからであると考えられる。ほかに，やはり表象を示すということから，心像（image mental）をあらわすにも適しているといえる。つぎのような，願望をあらわす例は，心像をえがき出している端的な例であろう。

(38) Ah ! **dormir** seulement une heure ! (Mauger 1968, p.261)
ああ！ 1 時間だけでも寝られたらなあ！

また，つぎのような言い返しの例がある。

(39) Moi, **avoir fait** ça ! (idem)
おれがそんなことをしたって !?

この例は，対話者の発言の受けなおしであるが，感情的な反発の価値がくわわっている。対話者の発言内容をあくまで表象レヴェルでとらえようとすることから，現実としての定位を拒否することになり，反発の価値が出てくるのである。

同様に，単純未来も，不定法形態素 -r をふくんでおり，表象レヴェルにおいて機能する。青木（1998）は，多数のこれまで重視されてこなかったタイプの用法を考察し，単純未来が表象の成立をあらわすという分析をおこなっている。この点は本稿の主張に近いので，以下に重要な例をみておく。

(40) Cette année ton anniversaire { **tombera / tombe** } un dimanche.
（青木 1998, p.117）
今年は君の誕生日は日曜にあたる。

(41) Le prochain train vous { **fera / fait** } arriver à Paris 6 h 13.
（idem）
つぎの列車にお乗りになると，6 時 13 分にパリに到着します。

(40)のような，未実現ではあるが絶対的確実性をあらわす例では，単純未来と現在形であまり違いは感じられない。しかし，それはたまたま文脈がそのように感じさせるだけで，単純未来と現在形の違いがあらわれるような文脈もある。たとえば(41)のような例であれば，単純未来をもちいると，駅員や案内所による公的予告，現在形をもちいると，個人的に教えているように感じられるという。また，つぎの(42)はカード占いの例であるが，占いでは圧倒的に単純未来が使われる。

(42) Trèfle. Dame renversée. Femme. ― On **se fera** inconsciemment une ennemie acharnée d'une brune, qui **fera** beaucoup de tort et **portera** le trouble dans l'existence.
（*L'avenir par les cartes*, cité dans 青木 1998, p.118）
クラブ。逆さのクイーン。女性。―無意識のうちに，褐色の髪をした，しつこい敵を作ってしまうでしょう。その敵は多くの災いをもたらし，生活にもめごとをもたらすでしょう。

さらに，(43)にみるように，天気予報の文も単純未来にかぎられる。

(43) Aujourd'hui － Région parisienne. － Le plein beau temps **persistera** après la rapide dissipation de quelques bancs de brume matinaux dans les vallées. Il **fera** de 11 à 14° le matin. Le vent du sud **sera** faible.
(*Figaro*, le 17 juin 1996 cité dans 青木 1998, p.120)
きょうのパリ地方。朝のうちセーヌ河流域は霧がたちこめますが，すぐに晴れて，快晴がつづくでしょう。朝の気温は 11 度から 14 度でしょう。南の風がふきますが，弱いでしょう。

青木（1998）は，上記に代表される例を見てゆくことにより，単純未来は，発話者が，カレンダー・時刻表・カード・計算・気象情報などの参照体系に依拠して，そのことにより表象を成立させていることを標示すると結論している。つぎのような例では，参照体系はより主観的なものであるが，やはり同様の図式で説明できるという。

(44) La décision est prise：je **terminerai** ma thèse cette année.
(青木 1998, p.126)
決心はついた。ことしこそ博士論文をおわらせるぞ。

(44) は決定（décision）という審級が先だっており，それに依拠して表象を成立させている例である。このように，単純未来の機能は，表象レヴェルに関わるものであるといえよう。

3.3. ここで，単純未来のモダールな用法についてみておきたい。モダールな用法については，渡邊（2009 b）でも検討したが，その後，渡邊（2012）で叙想的時制の概念を提唱し，さらに，渡邊（2012）の最終原稿提出後に Caudal（2012）が公刊されたこともあるので，渡邊（2009 b）の考え方は維持しつつも，叙想性とのかかわりでモダールな用法を見なおす価値が出てきたと思われるからである。

Touratier (1996) の用法分類にしたがうと，単純未来のモダールな用法には，つぎのようなものがある。

・推量的未来（futur de conjecture）：渡邊（2009）でいう現在推量用法

(45) Pour qui a-t-on sonné la cloche des morts ? Ah ! mon Dieu, ce **sera** pour Mme Rousseau.

（Proust, *A la recherche du temps perdu*, I, p.84, cité dans Touratier, ad loc.）

だれのために死者の鐘がなったのかしら？ あっ，まあ，ルソー夫人のためでしょうね！

(46) Croyez-vous pas que je viens de voir comme je vous vois Mme Goupil avec une fillette que je ne connais point. Allez donc chercher deux sous de sel chez Camus. C'est bien rare si Théodore ne peut pas vous dire qui c'est.

– Mais ce **sera** la fille à M. Pupin, disait Françoise, qui préférait s'en tenir à une explication immédiate, ayant été déjà deux fois depuis le matin chez Camus.

（Proust, *A la recherche du temps perdu*, I, p.55, cité dans Touratier, ad loc.；ただし Touratier による省略箇所をもとに戻した）

「信じられますか，わたしはいまあなたを見るのと同じようにはっきりと，グーピルさんがわたしの知らない娘といっしょにあるいているのを見たのですよ。だからちょっと，カミュさんの店に行って，塩を 2 スー買ってきてくれないかしら。テオドールが彼女を知らないはずはないから」

「いや，それはピュパンさんの娘でしょう」とフランソワーズは言った。フランソワーズは朝からもう 2 度もカミュさんの店にお使いに行っていて，てっとり早い説明にとどめておくほうを好んだのだ。

・語調緩和の未来（futur d'atténuation）：

(47) Je ne vous **cacherai** pas que je ne suis guère satisfait.

（Imbs 1960, p.52, cité dans Touratier, p.180）

わたしはほとんど満足していないことをかくしますまい。

(48) Je vous **demanderai** de vous taire. （Touratier, ad loc.）

あなたにはだまっていただきたいと申しあげましょう。

・抗議の未来（futur de protestation）：発話者が賛同しない内容を修辞的に提示するもの。

(49) Vous vous emparez de son bien, de son coeur, et cette femme ne **criera** pas ! (Marivaux, cité dans Touratier 1996, p.181)
あなたはかの女の財産をとりあげ，心をとりあげて，このご婦人が泣かないとでもいうのだろうか！

・蓋然性の未来（futur d'éventualité）：

(50) C'était, **penserez**-vous peut-être, participer à l'erreur que je dénonçais au début.
(*Europe*, décembre 1949, p.146, cité dans Touratier, ad loc.)
それはわたしがはじめには糾弾していた誤りに自分もおちいることだった，とあなたはお考えになるかもしれません。

Touratier はこれらの用法は「時間的ではない」としているが, 渡邊（2009 b）でものべたように，本稿筆者の考えでは，いずれもなんらかの未来時との関連づけが可能なものである。

現在推量用法については，Damourette et Pichon（1911-1936, §.1821）による « [...] il y aura un moment où, sorti de doute, on pourra dire « C'est la fille à M. Pupin » »（「のちに，疑いから脱して，「それはピュパンさんの娘だ」といえるときがくるだろう」）にさかのぼる説明，すなわち，未来時において真偽が判明するであろうことがらを，いまのところ推測しているという説明が可能である。

語調緩和用法については，Touratier（1996, p.180）は，単純未来形が投影（projection）の表現であることから説明し，つぎのような言いかえを提案している。« j'envisage, je me propose de vous demander de vous taire »（「あなたに黙っていただくようお願いすることを，わたしは考え，提案する」）また，時制派のはずの Barceló et Bres（2006, p.109）さえも，« si vous voulez »（「あなたがお望みになるなら」）の挿入によりモダールな説明をこころみている。しかし，本稿筆者の考えでいえば，これも未来時に関連づけることはできる。語調緩和用法においては，発言動詞や遂行動詞が単純未来形におかれている。そのことによって，それらの動詞が発動する言語行為の遂行が未来方向へと擬制的に遅滞させられ，対話者の了承を待つことのできる時間的間隙が生じることになる。語調緩和の効果はその時間的間隙によって得られる。

抗議用法において単純未来形が果たしている機能は，日本語の「〜とでも言うのだろうか」という表現に類似している。すなわち，相手がまだ言ってはい

ないがこれから言いそうなことを先取りして提示しているのであり，抽象的ながら未来性が看取できる。

蓋然性用法は現在推量用法に近く，いまだ真偽が確認されていない内容であるがゆえに，その確認を先取りするかたちで単純未来形が用いられると考えられる。

3.4. 前節で概観した単純未来形のモダールな用法の機能は，いずれも，叙想的時制の概念をもちいてとらえなおすことができると思われる。以下，順次，モダールな各用法についてみてゆく。

単純未来の現在推量用法については，推量の対象となっている事態が，現実世界で時間軸上に展開しているのはいつか（このレヴェルを叙事的（*de re*）という）といえば現在のことであるが，発話者の視点が未来時におかれている（このレヴェルを叙想的（*de dicto*）という）ことから，単純未来形が使われている。このような叙想的時制としての現在推量用法に単純未来形が用いられるのは，まさしく，推量であることから，叙述内容が真であるか（P），偽であるか（non-P）が焦点化されており，そのことが分岐的時間への位置づけに適合するからであると考えられる。

すでに渡邊（2009 b）でのべたように，単純未来形の現在推量用法は，標準的なフランス語では衰退してきており，かわりに法的動詞（または準助動詞）devoir の認識的用法が，いわば拡大使用されるようになってきている。単純未来形の現在推量用法は古風，または南フランス風とされる。実際，つぎの例は Barceló と Bres によると，コルシカ人の話者によるものであるという。

(51) Paul n'est pas là. Il **sera** malade. (Barceló et Bres 2006, p.108)
ポールはきていない。病気なのだろう。

しかし，フランス語母語話者の意見では，つぎの例は，現代的な感覚でも(51)よりはるかに使う可能性があるという。

(52) Notre ami est absent : il **aura encore sa** migraine.
(Grevisse 1993[13], p.1258, §.857)
ともだちは欠席している。また例の偏頭痛だろう。

この(52)の容認可能性を，(51)にくらべて高める方向で作用しているのは，副詞 encore（「また」）と所有形容詞 sa（「彼の」）である。彼が習慣的に偏頭痛を遅刻や欠席の理由にしていることをうかがわせる。「遅れてくるだろうが，見ていろ，彼は偏頭痛のせいだというだろうから」というぐあいで，「のちには確認できる」という未来的な意味がいっそう強くなっている。前節でのべた，「未来時において真偽が判明するであろうことがら」という意味が明確なのである。それと同時に，未来時における確認の内容は彼の（習慣的）発言によっていることから，言説の他者性が介在している（**il dira qu'**il avait sa migraine「彼は，いつもの偏頭痛だったというだろう」）。このように，単純に事行が未来に位置づけられているのではなく，予想される彼の発言を介して位置づけられていることから，叙想的時制であることがわかる。

Dendale（2001）以降，Squartini（2008），Caudal（2012）[8] などが，単純未来の現在推量用法に，証拠性（évidentialité）[9] の標示という機能をみとめている。すなわち，推量用法の単純未来は，叙述内容が，明白な根拠のない推量（conjecture）をあらわすのに適し，その点で，根拠にもとづく推論（inférence）をあらわす devoir の認識的用法と対立する，という説である。つぎの例（53）は Dendale（2001）が引き，Squartini（2008）も賛同的に引用している例であるが，明確な根拠がない場合に相当し，単純未来形を用いることは自然であっても，認識的 devoir を用いることは不自然である [10]。

（53）On sonne. Je n'attendais personne pourtant. Ça { **sera** Jean peut-être / ?? **doit être** Jean }.
（Dendale 2001, p.339 et Squartini 2008, p.924）
呼び鈴がなっているが，だれを待っていたわけでもない。ジャンかもしれない。

逆に，つぎの例にみるように，明白な根拠があるときは，認識的 devoir が自然で，単純未来形は不自然になる。こちらは，Squartini（2008）から Caudal（2012）が賛同的に引用している例である。

（54）Au loin on voit apparaître un homme. Il { **doit être** / ***sera** } à bout, car il chancelle à chaque pas.
（Squartini 2008, p.923 et Caudal 2012, p.122）

遠くに男があらわれるのが見える。彼は力尽きているにちがいない。一歩あるくごとにふらついているから。

たしかに，以上で見てきたような推量・推論の区別は，単純未来形と認識的 devoir の用法を区別するには一定の有効性があるが，あくまでも結果的な使用の差異のひとつであるに過ぎず，単純未来形や devoir という形式そのものが直接これらの証拠性を標示しているとは考えにくい。このような文脈で devoir が証拠性を標示するのは結果的な解釈であるということについては，すでに渡邊（2004）で述べたので，ここでは単純未来形について考えてみたい。

単純未来形が本質的にあらわしているのは，(36) として図式を提示した，分岐的時間における期待世界へと事行を位置づけることである。一方で，時制のふたつの用法として，叙事的時制と叙想的時制がある。叙事的時制においては動詞であらわされる事行がそのまま時間軸上に（単純未来形の場合は未来時 t_{+1} に）位置づけられるのであるが，叙想的時制の場合は，P を眺望する視点が時間軸上に位置づけられる。その点のみがちがうだけで，結果的解釈として，推量の解釈が出てくるのである。推量の解釈は，叙述内容が真であるか（P），偽であるか（non-P）であるかが焦点化される場合であるから，そのことが分岐的時間への位置づけをおこなう単純未来形に適合するのである。

実は，Caudal（2012）の掲載されている *Langue française* 173 号は証拠性に関する特集であり，ほかにも，De Mulder（2012）が，半過去形の一部の用法を，証拠性を標示するものとして扱っている。これは叙想的時制のうち，渡邊（2012）で論じた部分と多くが重なり，個々の用法の記述に関しては再考が必要な部分もある [11]。本稿は半過去形を対象とするものではないので，くわしい再論は別の機会にゆずらざるを得ないが，ある時制形式が証拠性を標示するという考え方に対して本稿の立場からいうべきことは，結局，単純未来形の場合と同じである。すなわち，証拠性は，時制形式の本質的機能が，叙事的・叙想的な適用のされかたをすることによって，あくまでも結果的に出てくる解釈として考えられる，ということである。

3.5. つぎに語調緩和用法であるが，3.3 節でも確認したように，発言動詞や遂行動詞が単純未来形におかれていることによって，それらの動詞が発動する言語行為の遂行が未来方向へと擬制的に遅滞させられ，対話者の了承を待つことのできる時間的間隙が生じることになる。ここでいう「擬制的な遅滞」によっ

て話者の視点が未来時におかれることこそが, 叙想的時制であるゆえんである。

また，抗議用法は，相手がまだ言ってはいないがこれから言いそうなことを先取りして提示するものであり，そのことによって仮想的ながら未来時に視点がおかれる。単純未来形は，この視点を未来時に位置づけるという意味で，この用法においても，叙想的時制として用いられているといえる。

蓋然性用法については，現在推量用法にたいへんよく似ているので，詳述は不要であろう。現状では真偽が確認されていない内容について，その確認を未来時に位置づける叙想的時制であるといえる。

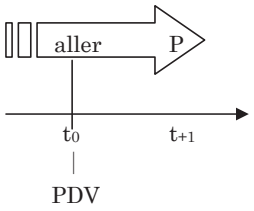
4．迂言的未来形の基本図式とその適用

4.1. こんどは迂言的未来形に目を転じ，その本質的機能を示す基本図式を提出しよう。

> 迂言的未来形は，その構成要素となる移動動詞 aller[12] の意味としてある漸進性を反映し，不定法であらわされる事行 P へと向かって増進しつつある準備段階を t_0 に位置づけるものである。発話者の視点 (PDV) は t_0 におかれる。
>
> 単純未来形の場合とちがって，分岐的時間への位置づけではなく，可能世界への分岐をもたない直線的時間 (temps linéraire) への位置づけである。すなわち，P / non-P の対立は前提されず，もっぱら P だけが想定されることになる。
>
> P の t_{+1} への位置づけは本質的ではなく, 未来時指示表現との相関によって結果的になされる。
>
> t_0 と t_{+1} の間に断絶はなく，aller によって連続性が保証されている[13]。

以上の基本図式を視覚化すると，つぎの(55)のようになる。

(55)



4.2. 迂言的未来形が，事態の「準備段階」をあらわすものであることを裏づける例をいくつか見ておこう。まず，2.6 節でふれるところのあった，「愛の告白の逆説」である。例文を再掲する。

(56) [＝(32)] Je t'**aimerai** toujours.
(57) [＝(33)] ?Je **vais t'aimer** toujours.

(56)にくらべて(57)が不自然なのは，現状を愛する「寸前」といってしまっていることからであった。それがとりもなおさず，迂言的未来形のあらわす，なんらかの事態の「準備段階」に対応しているのである。類例として，つぎのような例文があげられる。

(58) Quand il **va neiger**, je me sens triste.（Maingueneau 1999, p.98）
雪がふりそうになっていると，わたしは悲しい気分になる。
(59) Quand il **neige**, je me sens triste.
雪がふっていると，わたしは悲しい気分になる。
(60) Le ciel se charge de nuages. Il **va pleuvoir.**
（M. Barrès, cité dans 練尾 1998, p.38）
空が雲におおわれてきている。雨がふりそうだ。

(58)と，それに手をくわえた(59)を比較すれば明らかなように，(58)で示されている，「わたしが悲しくなる」状況とは，雪がふっているときではなく，まだふってはいないけれど，いまにもふってきそうな，雪雲が暗く垂れこめた状況なのである。また，(60)では，雨の前兆として，「空が雲におおわれてきている」ということが明示されている。仮説でいう「準備段階」とは，このようなことをさしているものである。

4.3. また，その準備段階が「増進しつつある」ものであることを裏づける事例として，de plus en plus（「だんだんと」），peu à peu（「少しづつ」）といった漸進性をあらわす副詞と親和性が高いことがあげられる。たとえば，以下にみるような，迂言的未来形とこれらの副詞との共起は多くみられる。

(61) [数年後に予想される携帯電話について] Le téléphone ordinateur *restera* dans la poche et l'écran *sera* visible soit sur des lunettes communiquant sans fil avec le portable soit sur un petit écran portable qui *aura* la taille d'un cadre à photo. En ce qui concerne la voix, on **va** de plus en plus **parler** à son téléphone pour lui commander un certain nombre de fonctions et, par ailleurs, l'oreillette *sera* placée sans aucun fil, un peu comme celle que portent les présentateurs de télévision.

(*Mobiles magazine*, février 2002, p.37)

コンピューターを兼ねる携帯電話はポケットに入れたままで，画面は，携帯電話と無線通信する眼鏡か，フォトフレーム程度の大きさの小さな携帯用画面で見ることができるようになるだろう。声に関しては，一定の機能を命令するために，われわれはだんだんと自分の電話にむかって話すようになってゆく。さらに，イヤフォンは，テレヴィの司会者のように，無線で耳につけるようになるだろう。

(61) では，前後の文脈をやや長めに引用しておいたが，全体としては，Le téléphone ordinateur **restera** dans la poche..., l'écran **sera** visible..., un petit écran portable qui **aura** la taille de..., l'oreillette **sera** placée... のように，未来の携帯電話を想像して，その内容が明確に単純未来を基調とした文によって表現されている。それにもかかわらず，on **va** de plus en plus **parler** のところだけ，わざわざ迂言的未来形に切りかえられているのである。この切りかえには，de plus en plus によってあらわされる事態の漸進性が影響していると考えられる。

フランス語母語話者によると，この例はつぎの (62) のように，単純未来形で言いかえることはまったく自然であり，むしろもとの (61) で迂言的未来形を使っているほうがやや唐突に感じるほどであるという。

(62) En ce qui concerne la voix, on **parlera** de plus en plus à son téléphone pour lui commander un certain nombre de fonctions...

さらに，(63)のように，de plus en plus をとりのぞいたり，(64)のように，おなじ文章のなかで，de plus en plus がもともと共起していないところで使おうとすると不自然になるという。

(63) ? En ce qui concerne la voix, on **va parler** à son téléphone pour lui commander un certain nombre de fonctions...

(64) ? Le téléphone ordinateur **va rester** dans la poche et l'écran *va* **être** visible...

これらのことから，(61)では，本来は不自然な迂言的未来形が，de plus en plus との共起のおかげで許容されるようになったと考えられる。

(65) Pourtant, il se trouve quelques experts ― et non des moindres ― pour prétendre que l'Internet **va** peu à peu **absorber** le trafic téléphonique. Ainsi pour Christian Huitema, chercheur spécialiste des réseaux, « il est évident qu'à terme il y aura intégration des voix et des données sur l'Internet. Dans le futur, on ne vendra plus de postes téléphoniques mais des outils de communication dont le téléphone ne sera qu'une composante. »

(*Libération*, le 31 octobre 1995)

しかしながら，専門家たちーそれも，少なくはない専門家たちーが，インターネットが少しづつ電話の情報通信にとってかわってゆくと主張している。たとえば，ネットの専門研究者，クリスチャン・ユイテマによれば，「いつかはインターネットで声の通話もデータ通信もインターネットに統合されることは明らかだ。将来は，もはや電話機が売られるのではなく，電話もその一部分でしかないような通信機器が売られるようになるだろう。」

(65)においても，(61)と類似したことがいえる。すなわち，将来の通信事

情を想像する文脈であり，アプリオリには単純未来形と親和性の高い文脈である。単純未来形で示されている後続部分は，専門家の発言の引用であるという意味ではちがうものの，この場合は例示をあらわす連結辞 ainsi[14] を介していることから，迂言的未来形で言いあらわされている部分と内容的には均質であることがわかる。しかし，専門家の発言は，il y **aura** intégration..., on ne **vendra** plus..., le téléphone ne **sera** qu'une... というように単純未来形のみの連鎖であるのに対して，(65) の第 1 文では迂言的未来形が用いられている。これには，漸進性をあらわす副詞句 peu à peu の共起が作用しているものと思われる。

フランス語母語話者に感覚をたずねたところ，(65) は，現在形（il **se trouve** quelques experts など）が使われていることもあって，(61) よりはるかに迂言的未来形を使いやすい文脈であり，

(66) ? Pourtant, il se trouve quelques experts — et non des moindres — pour prétendre que l'Internet **absorbera** peu à peu le trafic téléphonique.

のように単純未来形を使うことが不自然とさえ感じられるという。

以上のように，de plus en plus，peu à peu といった漸進性をあらわす副詞と迂言的未来形との親和性は高く，迂言的未来形が「増進しつつある準備段階」を示していることが裏づけられる。

これまでは，迂言的未来形の主として時間的・アスペクト的な用法の特徴をみてきた。モダールな用法については，そのひとつを次節で論ずることとする。

5．否定とのかかわりと「異常なふるまい」

5.1. 以上で提唱した単純未来形と迂言的未来形の仮説を全体的に裏づける現象として，否定とのかかわりをあげることができる。単純未来形の否定文がひろく見られるのに対して，迂言的未来形が否定文におかれることは稀である (cf. Jeanjean 1988, p.253)。通常，未来に想定される事態の否定には，(67)，(68) のように単純未来形が用いられる。

(67) Ces gens-là **ne paieront pas** de taxe d'habitation.

(L. Jospin sur France 2, mars 2000,
cité dans Novakova 2001, p.169)
その人たちは住民税を払わないことになるでしょう。

(68) Je **ne** vous **mentirai pas** ! je **ne** vous **trahirai pas** ! je **ne** vous **décevrai pas** !
(N. Sarkozy, le 26 mars 2007, 大統領選挙における演説)
わたしはうそをつきません！ みなさんを裏切りません！ みなさんを失望させません！

それに対して，迂言的未来形の否定には，特異な意味あいがある。後論を先どりしていうと，「non-P の選択」(内部否定 négation intérieure，あるいは記述的否定 négation descriptive) ではなく，「P の選択に対する否認」(外部否定 négation extérieure，あるいは論争的・反駁的否定 négation polémique ou réfutatrice) をあらわすという点で，単純未来形の否定とはまったくことなる[15]。つぎの(69)～(71)のような例がこれにあたる。

(69) ― Fais attention, **tu vas casser** le verre !
― Mais non, je **ne vais pas le casser** ! (Novakova 2001, p.170)
―気をつけて，グラスを割っちゃうよ。
―とんでもない。割ったりなんかしないよ。

(70) N'aie pas peur. Je **ne vais pas te manger.** (Franckel 1984, p.65)
こわがらないで。取って食おうっていうんじゃないんだから。

(71) Mais où on irait ? Il est déjà tard... On **va** quand même **pas se coucher** dans les dunes...
(scénario de film *Week-end à Zuydcoote*, cité dans 樋口 2012, p.76)
でも，どこに行こうっていうの？ もう遅いわ ... まさか砂丘で寝ようっていうんじゃないでしょうね ...

5.2. 練尾 (1998, p.42) は，「「ためらいのある否定」には近接未来形 [＝迂言的未来形] が使われ」ると指摘している。しかし，「ためらい」があるかどうかという差異は本質的ではない (それどころか，本稿筆者の感覚では，(69)～(71)の否定には，けっしてためらいがあるわけではなく，むしろ「おおよそそんなことはありえない」，「発話者としてはまったく想定外」といった，強

い否定であると思われる)。(69)～(71)のような例を理解するためのかぎは，対話者のさきだつ発言や行動をふまえて，それに対する反駁として出された外部否定的な文である点にこそある。

否定に関するこの現象は，単純未来形が分岐的時間への位置づけをあらわし，迂言的未来形が直線的時間への位置づけをあらわすという本稿の仮説と合致する。分岐的時間においては，P / non-P の選択がもともと問題になっているので，否定は対となる選択への移行として解され，内部否定になる。それに対して，直線的時間には P にむかう単一の流れしかなく，それに否定がかかわるためには，aller + P を主張する他者を前提としたうえで，それに反駁しているという，外部否定の解釈にならざるを得ないのである。

なお，Schrott（2001）は，「aller ＋不定法」の(69)～(71)のような用法を，「異常なふるまい」（allure extraordinaire）をあらわす用法として，迂言的未来形とは別扱いしているが，否定が外部否定であるという観察については本稿と一致している。本稿の立場からいうと，迂言的未来形がこのような場合「異常なふるまい」を標示しうるのは，それ自体では単純に P へとむかう直線的時間を標示する迂言的未来形に，外部否定がくみあわさることにより，言説の他者性，反論性がきわだつようになるからである。

5.3. しかし，これまでにみてきた例は，単に迂言的未来形が（めずらしく）否定されただけの例としてじゅうぶんに理解できるものである。実は，「aller ＋不定法」の，「異常なふるまい」をあらわすモダールな用法として，本当に時制形式としての迂言的未来形と区別しなければならないのは，(69)～(71)のような例ではなく，つぎの(72)，(73)のような例であると思われる。

(72) M. le Grand **alla dire** sottement : « ..... ».
(Damourette et Pichon 1911-1940, §. 1652)
ルグラン氏はおろかにも「.....」と言ってしまった。

(73) Oui, une voiture toute neuve. Et ce connard **est allé** m'**emboutir** une aile ! (Larreya 2005, p.351 et 川口 2006, p.8)
そうだよ，まっさらの新車だよ。それを，あの莫迦はフェンダーをへこませてくれちゃったのさ。

このような例を時制形式としての迂言的未来形と区別しなければならない理

由は，この用法においては aller をすべての時制（(72)の場合は単純過去形，(73)の場合は複合過去形）におくことができることである。時制としての迂言的未来形にあらわれる aller は，文法化の結果として，直説法では現在形または半過去形にしか活用しない[16]。したがって，移動動詞としての aller からの文法化を考えると，「異常なふるまい」用法のほうが aller の原義に近く，時制形式としての迂言的未来形のほうが相対的に文法化が進んだ用法であると考えられる。

5.4. (72)，(73)のような「aller ＋不定法」のモダールな用法については，川口（2006）が詳細に論じている。その基本的な考え方は，移動動詞 aller が，空間移動の意味からのメタファーによってモダールな意味をあらわすようになったというものである。aller の意味に関係する項目として，出発点 A，到着点 B，移動体 M，発話者 S があり，M を B に位置づけることが空間移動の意味であるとする（ibidem, p.11）。これを抽象化し，A，B を地点ではなく状況と考えることで aller の基本図式が編成できるとし，つぎのようにのべている。

(74)「M は出発点で状況 A を持ち，M の到達点の状況 B を志向する。M に与えられた状況 A と志向する対象としての状況 B があり，A が B に合致することが望まれる。これを動詞 aller の基本的なシェマとする」（ibidem, p.12）

「異常なふるまい」をあらわす用法に関しては，つぎのように説明している。

(75)「S' [＝共発話者] が引き受ける状況 A [＝ aller に後続する不定法におかれた動詞の事行] に対して S はそれに矛盾する状況 B [＝ A の結果として出てくる，のぞましくない状況] を構築する。そこで S' の A が否定されるような意味効果が生まれるのである」（ibidem, p.15，ただし [...] 内は本稿筆者による補足）

移動動詞 aller から，迂言的未来形や「異常なふるまい」用法などにいたるメタファーを想定できるという点は首肯できる。しかし，(74)で「A が B に合致することが望まれる」といっているのに，(75)では B はかならずのぞま

しくない事態であること，そして，より本質的には，M，A，B，S，S' などの，関与する項目とそれらの布置には関心があるものの，肝腎の移動の概念そのものが図式中に占める明確な位置がないということは問題であると思われる。

5.5. それに対して，本稿の考えでは，移動動詞としての aller にみとめられる動的性格・漸進性に着目し，迂言的未来形については，「増進しつつある準備段階」をあらわすとする仮説をたてた。「異常なふるまい」用法についても，基本的にはそのような漸進性の意味が保たれていると考える。そして，直線的時間によって不可避的に，後続不定法であらわされる事行へとむかってゆくことを「aller ＋不定法」があらわしていると考えると，あたかも，異常とみなされる行動をとる主体が，そうした不可避性につき動かされているかのごとき意味効果が出てくることが理解できる。この用法の「異常なふるまい」という解釈は，そのようにして出てくるのではなかろうか。

不可避性は，すくなくともフランス語においては，否定的なニュアンスをおびやすい。たとえば副詞・間投詞 décidément の意味について Ducrot らが言っていることに注目しよう。

(76) « On peut observer que, dans la majorité des cas, les faits dont la répétition déclenche l'interjection *décidément !* sont des faits jugés regrettables, désagréables, négatifs : nos exemples en témoignent. **Cette tendance est peut-être à relier à l'attitude, très générale dans notre civilisation, consistant à voir dans la « force des choses » un élément hostile** (c'est la même attitude qui conduit à réserver d'habitude le mot *fatal* pour qualifier des événements indésirables) »

(Ducrot et alii 1980, p.137, 強調渡邊)

「くりかえしによって，間投詞 décidément ! [「やっぱり !」に近い] をひきおこすもととなる事態は，大多数の場合残念で，不快で，否定的な事態である。われわれの例文がそれを証明している。この傾向は，われわれの文明ではたいへん一般的な態度，すなわち，「不可避のこと」に敵対的な要因を見ようとする態度にむすびつけられるかもしれない（fatal「宿命的な」という語を，もっぱらのぞましくない出来事を形容するためにとっておくようにするのは，まさに同

じ態度である）。」

「aller ＋不定法」の場合も，のぞましくない行為をしてしまう主体を，あたかも，漸進する直線的時間にのせられて，いやおうなく行動に仕向けられているものとしてえがきだすことにより，（76）のような見かたが発動され，マイナス評価という意味効果が出てくるのではなかろうか[17]。

6．おわりに

以上，本稿では，フランス語の単純未来形と迂言的未来形の機能を中心的な考察対象としてきた。単純未来形は分岐的時間のなかの期待世界への位置づけを本質的に標示し，それが叙想的時制として用いられる場合，多様なモダールな価値を生む。それに対して，迂言的未来形は，直線的時間のなかで，ある事行の実現にむけて増進しつつある準備段階が発話時点に位置づけられることを本質的に標示する。直線的時間であるがゆえに，外部否定としか相いれない。これらの本質的機能の図式の差異（分岐的時間 / 直線的時間，未来時指向 / 発話時点指向，内部否定 / 外部否定）が，両形式のさまざまな差異を生んでいることが確認された。

本稿ではフランス語以外の言語にはあまりふれなかったが，さらに，他の言語との対照研究も必要である。たとえば，英語における未来表現には，Wada（2001），（2009），（2011）で論究されているように，単純現在形，現在進行形，be going to による未来表現，そして will による未来形という 4 つの形式のあいだで競合があり，未来時に言及しうるような現在進行形が存在しないフランス語にくらべると，明らかに使い分けの網目が細かい，複雑な構造を呈している。とくに，Wada（2001），（2009）で提示されている be going to の時制構造は，フランス語の aller と同様の移動動詞を用いていることもあり，本稿で迂言的未来形について想定した構造と類似した部分も多い（そのため，迂言的未来形を考察してゆくうえでも，触発されるところが多くあった）が，具体的な用法においては，相違点も少なくない。もっとも顕著なちがいをあげると，be going to は，（77）の one day のように，明確に未来時に視点をおく副詞とともに用いることもできることが注目にあたいする。

（77）“Wrong!” Buford roared. “It’s yours! So from now on you better be

lookin' behind you when you walk. 'Cause one day you**'re gonna get** a bullet in your back..."

(C. Gardner, *Back to the Future,* III, p.94, cité dans Wada 2001, p.248)

「ちがうぞ！」とバフォードはどなった。「おまえのだ！ これからは，後ろに気をつけるんだな。いつか，背中に弾を撃たれることになるから」

これに対して，フランス語の迂言的未来形は，2.3 節でみたように，(one day に対応する) un jour のような，発話時点からへだたった未来時を指示する副詞との共起はたいへん不自然である。英語では，be going to が未来時制としての機能を確固たるものにしているが，フランス語ではそれは基本的に単純未来形の領分であって，迂言的未来形を用いることはむずかしいのである。このような差異は，それぞれの言語での研究の深化を前提としながらも，言語間での比較を進めてゆくことでさらに明らかになってくるものと思われる [18]。

註

1　この論文は，2008 年度～ 2012 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番号 20520348「フランス語および日本語におけるモダリティの意味論的研究」(研究代表者：渡邊淳也)，ならびに 2012 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番号 24520530「日英語ならびに西欧諸語における時制・モダリティ・アスペクトの包括的研究」(研究代表者：和田尚明) の助成をうけて行なわれた研究の成果の一部である。査読委員として貴重なコメントをくださった和田尚明さん，フランス語のインフォーマントとしてご協力くださった Claude Lévi-Alvarès 先生，Baptiste Puyo さんにこころよりお礼申し上げたい。

2　この例文には註釈が必要かもしれない。パリの地下鉄では，多くの車輌で，降車したい乗客が自分でレヴァーまたはボタンを操作して扉をあけるようになっている。その扉をあける機能が，完全に停車するより早くからはたらくので，操作する乗客がのぞむなら，完全に停車するまえに降りることができる。

3　(18) については断絶・連続性の差異ではなく，軽い命令をあらわすモダールな用法であるから単純未来形が好まれるのではないかという疑問が起きるかもしれない。しかし，そうではない。あまり注目されていない事実であるが，住井 (1992 b, p.26) が指摘しているとおり，迂言的未来形にも命令用法は存在するのである。

(i)　Là, tu **vas faire** des excuses, toi maintenant.

(*Garçon !* , cité dans 住井 ad loc.)

ほら，謝れよ，おまえ，いますぐだよ。

この例でもまた，迂言的未来形の使用動機は，明らかに，発話時点を示す副詞 maintenant である。

4 このような議論をいっそう理論的に考えると，和田 (2010) の提唱する「C- 牽引」の概念と接続可能であると思われる。「C- 牽引とは，話者意識の存在する発話時を中心とした時間帯の磁場（「現在時の磁場」）へ引き寄せられる現象のことを言う」(ibidem, p.79) と定義される。時制形式が生み出しうる諸解釈のなかで，どの程度発話時点との強固な関係づけがなされるか，という点を説明しうる原理として注目される。

5 この例は，英語の be going to... についての議論のなかで出てきたつぎの例，

(i) Now we **are going to have** no money at the end of the month.
(Haegeman 1989, p.297 et Wada 2001, p.220)
いま（や），われわれは月末にはお金がなくなるだろう。

を参考にして，本稿筆者が仏訳し（ただし，フランス語の迂言的未来形は，あとでみるように否定との相性がわるいので，肯定文にしている），フランス語母語話者の確認を得たものである。(29) のような実例はいまのところ発見できていないが，母語話者の意見によると，なんら驚くような文ではなく，ことばをおぎなって言いなおすなら，

(ii) Ah, maintenant que tu as tout dépensé, on **va manquer** d'argent à la fin du mois !
ああ，いまや君がすっかり散財してしまったから，ぼくらは月末にはお金が足りなくなるよ！

というような意味合いで使えるとのことである。

6 「視点」の概念については渡邊（2008, pp.25-26）でも言及した。東郷（2007, p.22）がいうように，「話し手（または話し手が自己を投影する人物）が，その時点に身をおいて，そこから過去を振り返り，未来を望むことができるような時点」と規定できる。ただし，東郷（2007）の「視点」は，註 17 でみるように，現在形，半過去形（が示す時点）にしか位置できないとされている。しかし，本稿の立場からいうと，単純未来形と迂言的未来形を区別するには，視点が未来時におかれることも可能でなければならず，その役割は，「基準点」(point de référence, 同じく東郷の規定では「話し手（または話し手が自己投影する人物）が，ある出来事 E1 を時間軸上に位置づけるときに利用する他の出来事 E2 の起きた時点」）では代用できない。

7 したがって，期待世界も可能世界のうちの一特殊ケースである。

8 本文で言及した以外にも，Sthioul (1998), Rocci (2000), Barceló et Bres (2006), Morency et Saussure（2006）など，フランス語の単純未来の現在推量用法にとりわけ着目した研究が近年多くなっていることは，この用法が標準的なフランス語で衰退してきていることを考えあわせると，驚嘆にあたいする。ある用法が消滅しようとしているにもかかわらず，その用法と他の形式との意味的な差異を探求しようとすることは，共時的な研究としてはいささか存立基盤を問われかねないことである。

9 証拠性とは，概略的には，発話者がみずからの発話内容の情報をどのように入手したか，まは，自らつくり出したかを示す文法的カテゴリーである。証拠性の概念については渡邊（2004），楊（2011）などを参照されたい。

10 Morency（2010, p.207）によると，医師が，検査結果が判明するまえに

(i) Vous **aurez** la grippe monsieur.
あなたはインフルエンザにかかっているでしょうね。

と言うのは自然であるが，検査結果が判明したあとに言うのは不自然である。このこともまた，単純未来形の現在推量用法が未来時における確認にむすびついていることを示すとともに，（発話時点においてはまだ）明確には根拠が得られていない推量をあらわすことを示していると思われる。

11 *Langue française* 173 号は渡邊（2012）の最終原稿を 2011 年 12 月に提出したあとに発行された特集であるため，Caudal（2012）も De Mulder（2012）も渡邊（2012）執筆に際してはまったく参看できなかった。

12 Novakova（2001, pp.114 sq.）は，未来時制を形成する助動詞の意味のなかに，未来のふたつの見かたがあらわれているという説をなしているので，参考のためにまとめておきたい。ひとつは，「到来する未来」（l'avenir qui vient à moi）であり，具体的には，ロマンス語の単純未来形（avoir 由来），devoir 系迂言形（例：英語 shall）などが該当する。さらに，文的なレヴェルでも，フランス語の « La fin de l'année approche »（年末が近づいてくる）のような例がある。これは未来に義務（obligation），必然性（nécessité）をみる，受動的（passif）な未来観である。Novakova の所説では，相対的に古い形式であり，中世的未来観であるという。もうひとつは，「行き先としての未来」（l'avenir vers lequel je me dirige）であり，ロマンス語の迂言的未来形（aller + 不定法），vouloir 系迂言形（例：英語 will, ルーマニア語 vrea）が該当する。文的なレヴェルでは，英語の « We're approaching the end of the year »（われわれは年末に近づいてゆく，つまり上記のフランス語のとらえ方とは逆である）のような例がある。こちらは能動的（actif），征服的（conquérant），自己中心的（égocentrique）な未来観である。Novakova の所説では，相対的に新しい形式であり，ルネサンス的ないし近代的な未来観であるという。

13 その意味で，迂言的未来形の基本図式を，結果残存型完了相と鏡像的関係にあるものとして扱う Gosselin（2010）の説には反対したい。Gosselin（2010, p.50）は，複合過去によってあらわされる結果残存型完了アスペクトを，視点の時区間 [I, II] に事行の時区間 [B1, B2] が先立っているものとして図式化し，迂言的未来形によってあらわされる前望（prospectif）アスペクトをちょうど結果残存型完了アスペクトの図式と対称的に，[B1, B2] に [I, II] が先立つものとして図式化している。しかしながら，実際には，結果残存型完了アスペクトの場合には，完了によって事行の終点という明確な境界（borne）がのりこえられたあとの時区間に視点がおかれているのに対し，迂言的未来形にあっては，そのような境界はなく，視点のおかれる発話時点との連続性のなかに事行が位置づけられるという差異がある。Gosselin の図式化はそれを無視しているのである。

14 ainsi の機能については，もっぱらそれを論じた渡邊（2001 a）を参照されたい。

15 これらの否定の諸類型については，渡邊（2010 a）を参照されたい。例文に付した訳からもわかるように，日本語の場合は，外部否定を，統辞的にも外部性をそなえた，迂言的形式であらわそうとする傾向がある。(69) の「割ったりなんかしない」，(70) の「取って食おうっていうんじゃない」，(71) の「寝ようっていうんじゃない」といった形式がこれにあたる。「内部否定」「外部否定」と

いう用語こそ用いていないものの，単純未来形の否定と迂言的未来形の否定の差異は，つとに Franckel（1984, p.68）によって明らかにされている。« Elle [=la négation de « aller + inf. »] correspond, non pas comme avec le futur, à la sélection de p' mais à la négation de la sélection de p »（aller + inf. の否定は，単純未来形の場合とちがって，p' の選択に対応しているのではなく，p の選択の否定に対応している）。

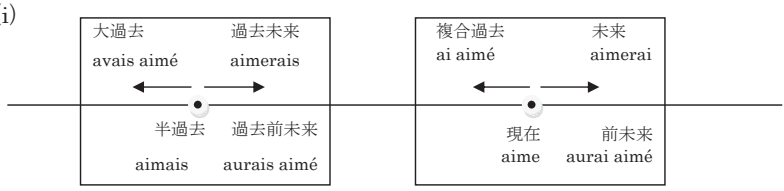
なお，2.2 節で（3）としてみた例，

（i）Je ne **vais** pas le **revoir** avant longtemps.

は，迂言的未来形の特異性を主張する本節の議論に対して，一見反例になるように見えるかもしれない。しかしこの例においては，否定は avant 句との関連で用いられた限定的な意味であり，通常の否定とはことなると考えられる。

16 時制としての迂言的未来形にあらわれる aller が，直説法では現在形または半過去形にしか活用しない理由は，つとに Damourette et Pichon（1911-1936）によって示された noncal（現在基準）/ toncal（過去基準）のふたつのレヴェルに各時制が分けられることにもとめられると思われる。現在形と半過去形のふたつが時制の照応の基本的時制になるなど，それらは時制体系全体において中心的な意義をになっているのである。東郷（2007）が noncal / toncal の区別をわかりやすく示しているので，以下に図（i）および説明（ii）を引用しておきたい。

（i）



（東郷 2007, p.20）

（ii）「（A）zone 1 は「現在」を中核とする時制群である。zone 1 に属する時制はすべて，「現在」の表す発話時点 t_0 に視点を置いて眺められた事態を述べる。

（B）zone 2 は「半過去」を中核とする時制群である。zone 2 に属する時制はすべて，「半過去」の表す過去の時点 t_1 に視点を置いて眺められた事態を述べる。

（C）視点を置くことができるのは，現在と半過去に限られる。その他の時制は，「基準点」にはなりえても，視点を置くことはできない。

（D）過去・現在・未来の三分法が定説となっているが，時制は zone 1 / zone 2 の二分法で考えるべきである。未来は独立の zone を形成しない。

（E）zone 1 を時間軸に沿って過去方向に平行移動すると zone 2 が得られる。この意味で，zone 2 は zone 1 が過去に投影されたものである。半過去は文字通り「過去における現在」である。

（F）単純過去は上の図式に位置づけることができない。単純過去はこれとは別の原理によって機能する。

(G) zone 1 と zone 2 とは断絶している。ここで言う「断絶」とは, 異なる「世界」を構成しているという意味である。」(東郷 2007, pp.20-21)

17　移動動詞からマイナス評価の意味効果が出てくる類例として，スペイン語の動詞 andar をあげることができる。「andar ＋現在分詞」はマイナス評価をあらわすことが多い。つぎの例は，それがさらに「ir ＋ a ＋不定法」(迂言的未来形) と組み合わさっている例である。

(i) No, no **vas a andar diciendo** tú esos, esas palabras.
(Torres Cacoullos 2000, p.167)
そんな（悪い）ことばを言ってまわるんじゃないよ。

これについても，フランス語の「aller ＋不定法」の「異常なふるまい」をあらわす用法と類似した理解が可能ではなかろうか。ただし，スペイン語では ir / andar という，フランス語にはない（多くの場合，どちらをフランス語に訳するときも aller が対応する）移動動詞の区別があるので，andar が ir にくらべて有標項としてニュアンスの色づけがされやすかったという事情があるかもしれない。

ちなみに，日本語にも「非行に走る」というように，移動動詞でマイナス評価をあらわす事例があり，類例といえるかもしれない。

18　その点については，和田 (2013) がすでに一端を示している。

参考文献

Álvarez Castro, C. (2007): « Interprétation du futur du l'indicatif et représentation d'événements futurs », *Cahiers Chronos,* 19, pp.7-24.

Anderson, E. W. (1979): « The Development of the Romance Future Tense », *Papers in Romance,* 1, pp.21-35.

青木三郎 (1998)：「現代フランス語の単純未来形の「多変性」について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 34, pp.115-133.

Aoki, S. et I. Tamba (2000): « Avenir, anticipation et catégorie linguistique du futur », *SCOLIA (Sciences Cognitives, Linguistique et Intelligence Artificielle)*, 12, pp.25-37.

Barceló, G. J. (2004 a): « Guillaume et le futur roman : à propos du futur périphrastique », *Modèles linguistiques*, 25, 1-2, pp.169-178.

Barceló, G. J. (2004 b): « L'occitan e lo catalan : doas lengas bessonas ? Un futur comprometent », *Linguistica occitana*, 1, pp.1-12.

Barceló, G. J. (2004 c): « Lo(s) futur(s) occitan(s) e la modalitat : elements d'estudi semantic comparatiu », *Linguistica occitana*, 2, pp.1-10.

Barceló, G. J. et J. Bres (2006): *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys.

Bourova, V. et L. Tasmowski (2007): « La préhistoire des futurs romans », *Cahiers Chronos,* 19, pp.25-41.

Caudal, O. (2012): « Relations entre temps, aspect, modalité et évidentialité dans le système du français », *Langue française*, 173, pp.115-129.

Celle, A. (1997): *Etude contrastive du futur en français et ses réalisations en anglais,* Ophrys.

Celle, A. (2006): *Temps et modalité,* Lang.
Confais, J.-P. (1990): *Temps, mode, aspect,* Presses Universitaires du Mirail.
Culioli, A. (1990): *Pour une linguisitique de l'énonciation*, 1, Ophrys.
Curat, H. (1991): *Morphologie verbale et référence temporelle en français moderne*, Droz.
Damourette, J. et E. Pichon (1911-36): *Des mots à la pensée*, 9 vols, d'Artrey.
Dahl, Ö (éd.)(2000): *Tense and aspect in languages of Europe*, Mouton de Gruyter.
De Mulder, W. (2012): « Un sens épistémique pour l'imparfait et le passé simple ? », *Langue Française*, 173, pp.99-113.
Dendale, P. (2001): « Le futur conjectural versus *devoir* épistémique », *Le français moderne*, 69, 1, pp.1-20.
Desclés, J.-P. (1995): « Les référentiels temporels pour le temps linguistiques », *Modèles linguiatiques*, 32, pp.9-36.
Enç, M. (1996): « Tense and Modality », Sh. Lappin (éd.): *The handbook of contemporary semantic theory,* Blackwell, pp.345-358.
Fleischman, S. (1982): *The future in thought and language*, Cambridge University Press.
Forest, R. (1993): « « Aller » et l'empathie », *Bulletin de la Société de linguistique de Paris*, 88, pp.1-24.
Franckel, J.-J. (1984): « « Futur « simple » et futur « proche » », *Le français dans le monde*, 182, pp.65-70.
Gosselin, L. (1996): *Sémantique de la temporalité en français,* Duculot.
Gosselin, L. (2010): « Les relations entre périphrases aspectuelles et conjugaison en français », N. Flaux et alii (éds.): *Interpréter les temps verbaux*, Lang, pp.33-61.
Grevisse, M. (1993[13]): *Le bon usage*, Duculot.
Guillaume, G. (1970): *Temps et verbe*, Honoré Champion.
Helland, H. P. (1995): « Futur simple et futur périphrastique », *Revue Romane*, 30, 1, pp.3-26.
Huddleston, R. (1995): « A case against a future tense in English », *Studies in languages*, 19, 2, pp.399-446.
樋口詩織（2012）：「Quand même の用法について」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』27, pp.63-80.
Imbs, P. (1960): *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.
井元秀剛（2010）：『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房 .
Jeanjean, C. (1988): « Futur simple et futur périphrastique en français parlé », Cl. Blanche-Benveniste et alii (éds.): *Grammaire et histoire de la grammaire : hommage à la memoire de Jean Stefanini,* Publication de l'Université de Provence, pp.235-257.
川口順二（2006）：「モダリティ動詞 aller」『藝文研究』（慶應義塾大学）91, 3, pp.1-19.

Laca, B. (2004): « Les catégories aspectuelles à expression périphrastique : une interprétation des apparentes « lacunes » du français », *Langue française*, 141, pp.85-98.
Larreya, P. (2005): « Sur les emplois de la périphrase *aller* + infinitif », H. B.-Z. Shyldkrot & N. Le Querler (dir.): *Les périphrases verbales*, John Benjamins, pp. 337-360.
Leeman-Bouix, D. (1994, 2002[2]): *Grammaire du verbe français*, Nathan.
Le Goffic, P. et F. Lab (2001): « Le present « pro futuro » », *Cahiers Chronos*, 7, pp.77-98.
Maingueneau, D. (1999): *L'Enonciation en linguistique française*, Hachette.
Martin, R. (1983): *Pour une logique du sens*, Presses Universitaires de France.
Martin, R. (1987): *Langage et croyance*, Margada.
Morency, P. (2010): « Enrichissement épistémique du futur », *Cahiers Chronos*, 22, pp.197-214.
Morency, P. et L. de Saussure (2006) : « Remarques sur l'usage interprétatif putatif du futur », *Travaux neuchâtelois de linguistique*, 45, pp.43-70.
南舘英孝（1998）:「Aller + inf. と単純未来」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を考える』三修社, p.22-33.
Naffati, H. et A. Queffélec (2004): *Le français en Tunisie*, Réseau des Observatoires du Français Contemporain en Afrique.
練尾毅（1998）:「近接未来形について」東京外国語大学グループ《セメイオン》『フランス語を考える』三修社, p.34-44.
Nef, F. (1986): *Sémantique de la référence temporelle en français moderne*, Peter Lang.
Novakova, I. (2001): *Sémantique du futur*, L'Harmattan.
小熊和郎（1993）:「〈トコロダ〉と aller, venir de, être en train de ＋ infinitif」『西南学院大学フランス語フランス文学論集』29, pp.139-175.
Perret, M. (1994): *L'énonciation en grammaire du texte,* Nathan.
Reichenbach, H. (1947): *Elements of symbolic logic*, Macmillan.
Rocci, A. (2000) : « L' interprétation épistémique du futur en italien et en français », *Cahiers de linguistique française*, 22, pp.241-274.
Rotgé, W. (1995): « Temps et modalité », *Modèles linguistiques*, 31, pp.111-129.
佐藤正明（1985）:「Aller + inf. と未来形の機能的差異」『フランス語学研究』19, pp.70-80.
佐藤正明（1986）:「未来形と modalité」『東北大学教養部紀要』46, pp.288-308.
佐藤正明（1994）:「発話者の個人的評価を表わす前未来」『フランス語学研究』28, pp.1-13.
澤田治美 (2006) :『モダリティ』開拓社 . (とくに第 18 章「未来性からモダリティへ」)
Schogt, H. G. (1968): *Le système verbal du français contemporain,* Mouton.
Schrott, A. (2001): « Le futur périphrastique et l'allure extraordinaire », *Cahiers Chronos*, 8, pp.159- 170.
Söll, L. (1983): « De la concurrence du futur simple et le futur proche en français

moderne », Hausmann, F. J.(éd.): *Etudes de grammaire française descriptive*, Julius Groos, pp.16-24.
Squartini, M. (2001): « The internal structure of evidentiality in Romance », *Studies in Language*, 25, 2, pp.297-334.
Squartini, M. (2004): « Il Futuro e il Condizionale nelle lingue romanze », *Revue Romane*, 39, 1, pp.68-96.
Squartini, M. (2008): « Lexical vs. grammatical evidentiality in French and Italian », *Linguistics*, 46, 5, pp.917-947.
Stage, L. (2002): « Les modalités épistémique et déontique dans les énoncés au futur (simple et composé) », *Revue Romane*, 37, 1, pp.44-66.
Stage, L. (2003): « Les valeurs modales du futur et du présent », M. Birkelund et elii(éds.)*Aspects de la modalité*, Niemeyer, pp.203-216.
Sthioul, B. (1998): « Temps verbaux et point de vue », J. Moeschler (dir.): *Les temps de l'événement*, Kimé, pp.197-220.
Sten, H. (1952): *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Munksgaard.
住井清高（1992 a）:「現代フランス語における単純未来形の perfectivité / imperfectivité の対立について」『千葉大学大学院人文科学研究』4, pp.1-21.
住井清高（1992 b）:『現代フランス語における単純未来形の時間性とアスペクト性』千葉大学大学院文学研究科修士論文 .
住井清高（1993）:「前未来形の時間的用法に関する覚え書き」『千葉大学フランス文学研究』4, pp.13-31.
Sundell, L.-G. (1991): *Le temps futur en français moderne*, Acta Universitatis Upsaliensis.
Sundell, L.-G. (2003): « Le futur modal revisité », M. Birkelund et elii (éds.) *Aspects de la modalité*, Niemeyer, pp.217-227.
東郷雄二（2007）:「Je t'attendais. 型半過去再考」『フランス語学研究』41, pp.1-15.
Torres Cacoullos, R. (2000): *Grammaticization, Synchronic Variation and Language Contact : A Study of Spanish Progressive "-ndo" Constructions*, John Benjamins.
Touratier, Chr. (1996): *Le système verbal français,* Colin.
Vet, C. (1981): « La notion de « monde possible » et le système temporel et aspectuel du français », *Langages*, 64, pp.109-124.
Vet, C. (2003): « Attitude, vérité et grammaticalisation : le cas du futur simple », M. Birkelund et elii (éds.) *Aspects de la modalité*, Niemeyer, pp.229-239.
Vetters, C. (2001): « Le conditionnel : ultérieur du non-actuel », P. Dendale et L. Tasmowski (éds.): *Le conditionnel en français*, Université de Metz, pp.169-207.
Wada, N. (2001): *Interpreting English Tenses : A Compositional Approach,* Kaitakusha.
Wada, N. (2009): « The Present Progressive with Future Time Reference Vs. *Be Going To* : Is Doc Brown Going Back to the Future Because He is going to

Reconstruct It? », *English Linguistics,* 26, 1, pp.96-131.
和田尚明（2010）:「現在完了形の表す意味範囲の変遷とC-牽引：英蘭語比較研究」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）58, pp.75-112.
Wada, N. (2011): « On the Mechanism of Temporal Interpretation of *Will*-Sentences », *Tsukuba English Studies*, 29, pp.37-62.
和田尚明（2013）:「英語とフランス語の未来表現の比較」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）63, pp.107-146.
渡邊淳也（2001 a）:「連結辞 ainsi の機能について」『玉川大学文学部論叢』41, pp.161-184.
Watanabe, J. (2001 b): « Le conditionnel du « discours d'autrui » », *Etudes de langue et de littérature françaises*, 78, pp. 216-230.
渡邊淳也（2002）:「Devoir の認識的用法と条件法」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』17, pp.189-219.
渡邊淳也（2003）:「Devoir の機能について－認識的用法を中心に－」『玉川大学文学部論叢』43, pp.105-139.
渡邊淳也（2004 a）:「動詞 sembler の機能について」『玉川大学文学部論叢』44,. pp.93-112.
渡邊淳也（2004 b）:『フランス語における証拠性の意味論』早美出版社 .
渡邊淳也（2005）:「Non seulement について」『玉川大学文学部論叢』45, pp.81-96.
Watanabe, J. (2006 a): « Addition quantitative, addition qualitative et la locution *non seulement* », J. Kawaguchi et alii (éds.): *Cognition et émotion dans le langage*, 慶應義塾大学（21 世紀 COE 心の統合的研究センター）, pp.191-205.
渡邊淳也（2006 b）:「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法との対照研究」『文藝言語研究 言語篇』（筑波大学）50, pp.41-84.
渡邊淳也（2007 a）:「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法」『フランス語学研究』41, pp.54-59.
渡邊淳也（2007 b）:「間一髪の半過去をめぐって」『文藝言語研究 言語篇』（筑波大学）52, pp.151-175.
渡邊淳也（2008）:「分岐的時間の表象を用いた時制･モダリティの連関の説明の試み」『文藝言語研究 言語篇』（筑波大学）54, pp.15-44.
渡邊淳也（2009 a）:「時制とモダリティの連関への新たな接近法」『フランス語学研究』43, pp.77-83.
渡邊淳也（2009 b）:「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の綜合化・文法化について」『文藝言語研究 言語篇』（筑波大学）55, pp.123-144.
渡邊淳也（2010 a）:「拘束的用法の devoir, falloir の否定の多義性について」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）57, pp.25-41.
渡邊淳也（2010 b）:「フランス語と日本語における留保マーカーについて」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）58, pp.55-74.
渡邊淳也（2011 a）:「ステレオタイプ理論をめぐって」『フランス語学研究』41, pp.54-59.
渡邊淳也（2011 b）:「ジェロンディフと現在分詞について」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）60, pp.121-181.

渡邊淳也（2012）：「叙想的時制と叙想的アスペクト」『文藝言語研究・言語篇』（筑波大学）61, pp.191-234.
Weinrich, H. (1964): *Tempus*, Kohlhammer.
Wilmet, M. (1976): *Etudes de morpho-syntaxe verbale*, Klincksieck.
Wilmet, M. (1997): *Grammaire critique du français,* Hachette.
楊文江（2011）：「日語示証研究的歴史与展望」*Hiroshima interdisciplinary studies in the humanities*（広島大学），9, pp.30-56